



プロフィール

1955年 愛知県生まれ 大学卒業後 家業の絞染色「久野染工場」四代目を継ぐ
 1982年 工場内に絞り教室を開設
 1989年 ギャラリーを開設
 1992年 中部通商産業局長賞受賞
 1992年 「国際絞り会議」にて、ファッションショーのテキスタイルを制作
 1994年 「絞りテキスタイル新作展」を、イタリア コモで開催

現在、伝統的衣装類はもとより、三宅一生、コシノヒロコ、アベケンショウ、吉田ヒロミ、ニコル等のアパレル関係、舞台衣装、インテリアまで広く手がけ、絞りの普及に努めると共に、意欲的に新しい絞りの開発にチャレンジしている。



価値はどこにあるかを考えたとき「手で絞っている」というところに本質があり、布を限定することではないと考え、染料の調合と時間、圧力を徹底したデータ管理の元で行う「工業染色」という道を選択しました」職人の五感による「工芸染色」との違いを説明してくれた。

「管理は工業的ですが、表現は伝統工芸です。機械化することで労働集約的な産業からの脱却が図れ、クリエイティブな分野への発展が期待できます」感覚的な「工芸染色」とデータによる「工業染色」とは一体であると強調する。

クリエイターとの共同作業

久野氏は、ファッションデザイナーと共同で2年前にオリジナルブランド『ATSUMARI(あつまり)』を製品化している。「有松に人が集まる、技術が集まる」という思いを込めました。絞り製品はこれまで高級というイメージがあり、年齢層の高いユーザーを対象としていましたが、絞りの質感や機能にフレッシュなアイデアを取り込むことで、若いユーザーをターゲットに展開したいと考えています」と話す。

“絞り”を5つのジャンルとして捉える久野氏は「これまで受け継がれてきた伝統的工芸品としてのゆかたや着物製品、そしてお土産やギフトとしての絞り製品があり、この2つはこれからも伝統産業として継続されていくでしょう。しかし、伝統を超えた新しい絞りの可能性を引き出すシンボリックな製品開発が求められおり、そのキーワードが『ファッション』『インテリア』『アート』であると信じています」と新分野への意欲を語る。

伝統の技に、技術革新を追及する久野氏の素材を積極的に活用しようというファッションデザイナーも多く、第一線のデザイナー三宅一生、山本耀二、コシノヒロコ、トリキユキ・コシノジュンコなどが競ってコレクション作品に絞りを使っている。

「デザイナーとの交流により、同じ絞りでも全く次元の異なる作品が生まれることを知りました。私たちは単なる素材の提供だけでなく、そこに活かされた技術や特徴など、あらゆる要素を提案とし

て投げかけることで、初めて共同作業ができることを実感しました」。

クリエイター同士のぶつかり合いを通して、彼らのモノづくりの凄さを見せられたと久野氏は言う。

伝統の絆をつなぐ

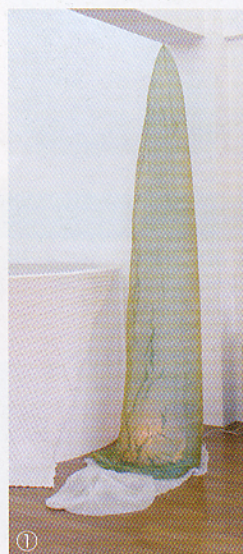
絞りの技術は古くインカの遺物のなかにも見ることができ、2000年の歴史を持つインドでは今日でも初期的な絞り染めを見ることができます。しかし何と言ってもその種類の多さと、絞り染めを芸術の域まで高めたのは日本だけといっても過言ではなく、伝統を伝えていくのも大切な使命だという。久野氏は「インターン制度を活用し、学生たちに体験を通して技術を教えています。それは単なるイベントではなく、私たちのような中小零細企業が教育現場に対してどういった役割を担っているのか教え、そこで感じるものをエネルギーに新し

いものを創造して欲しいと願っています」現状打破することも必要だが、次世代に何を残せるかが重要だという。

絞り加工に対する関心は日本より欧米など海外での注目度が高く、日本のアイデアも瞬く間に海外でマネをされ市場に流出してくるという。

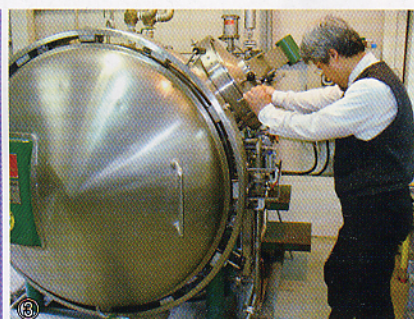
久野氏は「伝承技術は時としてマネだけで伝わっている部分もあります。絞り染めも型紙ができた時点で産業化され、同じものが幾つもできるわけですが、実際はそのマネの上にそれ以上の技術をプラスして、新しいものを創造してきました」技術をオープンにすることも生き延びるために必要だと話す。

他の国や地方とのコラボレーションをしていきたいという久野氏は、泥染めとの組み合わせや漆との融合など、日本の伝統を絶やさないためにも、異業種との交流を続けていきたいと抱負を語る。



①

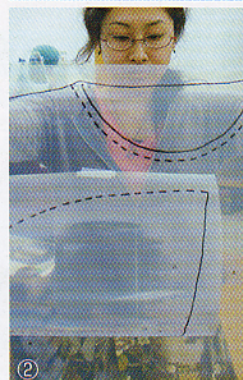
① 硬質感のある部屋に対し、絞りのナチュラルな柔らかさを活かしたインテリア作品
 ② 絞りの型紙となるフィルム。以前は伊勢型紙が使われていた
 ③ 高圧セット染色機により、多彩な素材の染色が実現した



④



⑦



②



⑤



⑥

④ 「嵐絞り」の作業工程を説明する久野氏
 ⑤ オリジナルブランド「ATSUMARI」は若い世代にアピールした作品
 ⑥ 昔ながらの板締め絞りの文様
 ⑦ 2階の加工作業場では緻密な作業が行われている